

会議名:令和4年度 沼津市自転車活用推進協議会

開催日時:令和5年3月16日(木)10時00分~12時00分まで

開催場所:沼津市民文化センター 大会議室

公開・非公開の別:公開

傍聴者数:0人

会議次第	1 開会 2 議事 沼津市自転車活用推進計画における令和4年度実績及び令和5年度の取組について 【資料1】~【資料4】 3 その他 4 閉会
------	---

<出席者>

	氏名	所属	欠席・代理出席
1	中村 文彦	東京大学大学院 新領域創成科学研究科 スマートシティデザイン社会連携講座 特任教授	
2	小宮山 学	東海旅客鉄道(株)沼津駅 駅長	
3	木口 典久	(株)伊豆箱根バス 三島営業所長	欠席
4	鈴木 智善	静岡県タクシー協会 沼津・三島支部長	
5	佐野 千代	沼津商工会議所 総務管理課長	欠席
6	鈴木 拓	特定非営利活動法人 沼津観光協会 事務局長	
7	小野 剣人	特定非営利活動法人 カケルバイク 理事長	欠席
8	米山 廣三	沼津市自治会交通安全会連合会 会長	
9	河本 秀昭	沼津市高校生自転車マナー向上委員会責任者 (加藤学園高等学校 生徒指導部長)	欠席
10	渡部 正一	国土交通省中部地方整備局 沼津河川国道事務所 事務所長	代理出席 野本計画課長
11	望月 博文	静岡県沼津土木事務所 企画検査課長	
12	土屋 直也	沼津警察署 交通第一課長	
13	栗原 浩一	公募委員	欠席
14	中川 義広	公募委員	欠席
15	椿 美邦	公募委員	

事務局:まちづくり政策課、建設デザイン調整室、生活安心課、ウィズスポーツ課

・主な意見等について

- ・今年の4月1日よりヘルメットの着用が努力義務化される。今回市が取り組んだシェアサイクルも含め、安全に自転車を利用してもらうために、市全体でヘルメットの着用促進に取り組んでいくべきである。
- ・他市町ではヘルメット購入費補助を設けているところもある。ヘルメット置場としての駐輪場の活用、シェアサイクルではヘルメットのレンタルを検討して欲しい。
- ・沼津市の自転車活用という観点におけるシェアサイクルポート増設について、今回の増設は観光利用のニーズが見込まれる場所に焦点が当たっているため、日常利用には効果が薄い可能性がある。市民利用の観点か、ビジター利用の観点に焦点を当てるのか丁寧に整理する必要がある。
- ・現在事業者がシェアサイクルの活用推進に注力をしてきているため、ビジネスとして採算性が持てるように市民やビジターの好意部分に上手く入るよう繋ぐ役割を市に期待する。
- ・子どもが自転車を利用し始めるタイミングが自転車の利用促進においてはポイントになるのでは。学校の区域もしくは学校にシェアサイクルが置いてあれば、親が子どもへ自転車の乗り方を教える際にシェアサイクルを利用してもらい、その結果として自転車の個人所有に繋がるといった可能性も考えられる。
- ・資料2に記載のあるゾーン30プラスの設置効果については、設置以前より車の速度が下がっているか、車の通行量の減少がしたか、当該地区の事故件数が減少したのかの3点について検証すべきである。
- ・ハンプは自動車に対して効果的に機能を発揮するのであるが、自転車や車椅子、ベビーカー利用者に対しては形状の面から安全性に課題があるため、留意が必要である。
- ・資料4について、措置25に市職員の自転車通勤・自転車移動の促進とあるが、市の中で各部・各課にて自転車通勤者がどれくらいいるか、自動車通勤から自転車通勤への転換推移を把握すると良い。
- ・目標3「健康増進のため自転車を利用する人の割合」という指標については、健康増進など、どのような意識で自転車を利用しているかといった観点も把握できると良いため、どこかのタイミングで調査することを検討して欲しい。
- ・目標3、4の実績は目標値を遥かに上回っているため、計画の中間年において適当な数値を再設定していくと良い。
- ・目標4の措置29、32について取り組んでいる内容は観光の面で重要な取組である。数多ある観光地の中で沼津を選んで貰うツールとし、紙媒体やSNSが活用される。新たにまたプランを作成する際は飲食店等と協力し、魅力ある情報発信を行うことを期待する。
- ・ラブライブ関係のイベントが8月まで開催されるため、ビジターが多く訪れることが予測される。自転車利用に波及するよう観光プラン作成に取り組んで貰いたい。
- ・最近の若者は「Tik Tok」等の短い動画で情報収集を行うことがトレンドである。自転車利用時の安全啓発やシェアサイクルの利用方法、自転車を活用した観光プランの紹介等をショート動画にまとめ配信することにより、若者に波及してくるのではないだろうか。
- ・資料3の目標2の指標について目標値は32%であるのに対し、現状は14%ほどである。
- ・今回の結果を受け、なぜ自転車から車への転換が起こったのか、今後もこの傾向は続くのか、どうやったら自転車へ転換できるのか等を、自転車活用を推進していく上で考えなくてはならない。
- ・社会実験を実施した電動キックボードについては死亡事故もあったため導入には慎重になって欲しい。
- ・電動キックボードとシェアサイクルの共存を上手く図らなくてはならないため、どうシェアリングを使い分けるのか、役割分担をどうするのかといった議論も重要である。

以上